

精神保健福祉援助実習教育における評価

The Study on Evaluation for Education for Social Work Practice for People with Mental Disorder

福山平成大学 長崎 和則

[キーワード (Key Words) : 実習評価 (evaluation for social work practice) , 評価項目 (evaluation items) , 評価基準 (evaluation standard) , 評価方法 (evaluation method) , グラウンデッド・セオリー・アプローチ (grounded theory approach)]

はじめに

精神保健福祉士法が制定され5年が経過した。そして、現任者に対する経過措置も終了し、大学等での養成教育に関する質の向上が求められてきている。このようななか、精神保健福祉援助実習教育における実習評価に関しては、評価項目、評価内容、評価方法、評価基準について未だ確立したものがなく、その大部分を実習指導者の経験と勘に頼っているという現状がある。

そこで、本研究では、精神保健福祉援助実習教育における評価について、概念化と標準化を目指すこととした。

研究方法

精神保健福祉援助実習教育において、実習評価に関する項目と内容に関する質的研究を行うこととし、グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用した。そして、基礎データの収集を行うために、実習学生が配属されている実習先の施設で行われた実際の実習指導内容、並びに実習終了後に実習担当教員が学生に対して行った指導内容を録音した。これら指導はフィードバックと呼ばれ、その内容は実習の振り返りと学習内容の確認である。現時点で、録音したテープは約40本となっている。今後必要に応じて、録音を追加する予定である。

分析方法としては、録音したテープを逐語録にして、グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づき分析を行った。なお、現時点で分析は終了していないため、今回の報告は中間報告となる。

研究成果

逐語録をグラウンデッド・セオリー・アプローチに基づき分析した結果、次のようなことが確認できたので、例示する。

評価をするには、評価をする者と評価される者との間にパーソナルな人間関係が成立している必要がある。

評価する際に、何を評価するのかを事前に提示し、学生と指導者が共有している必要がある。

どのような方法によって評価するのかについても、事前に学生に提示し、指導者と学生が共有しておく必要がある。

実習では、目標を達成するためのプログラムの提示が必要である。また、そのプログラムで何を評価するのかを明示しておく必要がある。

評価は、実際に体験したことについて、学生が振り返り言語化することによって行われる。

質問してから答えるより自主的に発言する方が望ましい、という暗黙の価値判断が評価基準に影響している。

また、学生の自主性のありようによって、評価の「物差し」に差異が生まれる。

評価に関して教育機関と実習現場と学生の間での共通理解が必要である。

教育機関における講義等で、評価のシミュレーションが行われている必要がある。

いつ、どのように、学生に対して指示をするのかに関して明らかになっている必要がある。

評価には、構造がある。それは、部分的な評価と総合的な評価という次元と、途中評価と最終評価という時間の経緯の次元である。

対象者の問題を理解する際に、対象者のパーソナリティ理解だけにとどまらず、社会的な文脈のなかで認識していることが必要である。

実習指導者は、内的な評価の判断を行うと共に、そのことを言語化して学生に伝える必要がある。

実習指導者は、何を（評価項目）どのように（手段）評価するのかについて、事前に確認し、言語化し、さらに伝える必要がある。

実習指導者が評価（良い悪い、できているか否か）を伝え、次に質問、指示をすることが効果的である。

また、これらのことを通じて、次のようなことが考察できる。

評価項目に関しては、項目そのものがいまいである。また、評価項目にはいろいろなレベルがある。しかし、このことは十分に把握されていない。

評価基準は明確ではなく、適切に言語化されていない。そのために、学生はその基準を認知していない。

想定していなかったことであるが、評価項目と評価基準に加えて、評価について伝える方法や手順などを明らかにする必要があることが分かった。

評価方法が適切でないと、評価そのものも適切でない結果となる。

評価項目、評価基準、評価方法は関連している。実際に現場で指導を行う実習指導者は、これら評価の全体像を十分理解しておく必要がある。

実習評価は、評価する者と評価される者との共同作業であり、上記のことを相互に共有していることが求められる。

今後の課題

実習評価に関しては、項目、内容、基準、方法が重要であることが分かったが、その全体像はまだ不明である。今回の報告をもとに、グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく研究を継続し、評価に関して明らかにし、学生、実習指導者、実習指導教員が情報を共有し、よりよい実習が実現できることが求められる。

また、そのことが精神保健福祉士養成の質の向上に役立ち、よりよい精神保健福祉士が生まれることにつながると考える。さらに、適切な評価により、学生が評価による不利益を被らないようにし、さらには精神障害を持つ当事者の福祉向上に役立つことを目指したい。